

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 平成27年12月12日
(40号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
文責 事務局 宮本眞弓

人間学講座
第40講

「相田みつを
肩書きのない人生」

相田一人館長



■ 体験派の詩人

相田みつをの作品に「つまづいたっていいじゃないか にんげんだもの」があります。これはたった十数文字ですが、人によりいろんな受けとめ方があり、様々な感想が相田みつを美術館に寄せられます。「辛いとき苦しいときに励まされた」「勇気をもらった」というものは約七割、残りの三割は「怖い言葉です」その理由は、自分が怠けているときのこの言葉には、緊張感を感じるということです。

生前父は、こう話していました。どんな順調な人生であっても躓(つまず)かない人生などない。それは世の常である。自分はたった一つだけ躓かない方法を知っている。それはなにか。「なんにもしないこと」。人は何かに一生懸命取り組み、頑張ったりチャレンジしたりし、その結果として失敗や挫折など思いがけないことに出合う。それが人生の躓きであるから、躓かないためには、何もしないことだ、と逆説的に父は話していました。

父は大正十三年栃木県足利市で生まれ、生涯そこで暮らしました。父の人生は波乱万丈でした。小学校が義務教育だった時代に、二人の兄が家業を手伝ったお蔭で父は中学に進学、成績もよくエリートコースでした。しかし戦時下の中学には軍事教練があり、濡れ衣によりその教官の怒りを買ったために、進学を諦めざるをえない事態となりました。兄たちの戦死の報せが届いたのもその頃でした。

「道」

長い人生にはなあ どんなに避けようとしてもどうしても通らなければならぬ道ってものがあるんだな

そんなときはその道を 黙って歩くことだな
愚痴や弱音を吐かないでな
黙って歩くんだよ ただ黙って
涙なんか見せちゃダメだぜ
そしてなあその時なんだよ

人間としてのいのちの根が ふかくなるのは・この「道」という詩は父の自伝とも言っている作品です。これは誰に向けて書いたのか？私は相田みつをが自分に向けて書いたものだと思います。そういう意味では全ての作品が自分へのメッセージとも言えます。この詩では、愚痴や弱音は吐かずに歩けと、自分への励ましがあります。しかしそれだけではない、必死になってやってみて、ことがうまくいこうがいくまいが、結果として解ったことは「いのちの根がふかくなる」ということだと、父は自分に語っているのです。父は書家であり詩人ですが、イメージから言葉を紡ぐ詩人ではなく、すべて自分の体験からの言葉を詩にする「体験派の詩人」だと思います。

■ 七転八倒

終戦後、父は生協で働くのですが、そこでも事件が起こり、正義感の強いがために理不尽な目にあい、果てにやくざに殺されかけます。間一髪で助かったものの、そのことをきっかけに、みつをは人間不信になり、数年間廃人同様となってしまうしました。二三歳のときです。その後の作品に、

「七転八倒」

つまづいたり ころんだり するほうが
自然なんだな にんげんだもの

「七転八倒」ではなく、転びっぱなし、うまくいくことより、いかなることのほうがはるかに多いのだ。と、父はこの言葉を自分の人生の根底においていたと思います。それは開き直りではなく、ではどう生きるのか、それが父の作品のテーマでした。

父は生前、書家や詩人など名乗ったことはなく、

肩書を持つことを好みませんでした。父が世に出るようになったのは、詩集『にんげんだもの』の出版で六十歳のときです。当初はあまり読まれることもなく、本当に知られるようになったのは六七歳で亡くなった後のことです。

若い頃の父は、今知られているような書ではなく、いわゆる正統派の書を書いていました。しかしそれでは言葉に込めた思いが伝わらないと考え、相田みつをの書体にいきついたのです。

「一生青春 一生勉強」

その言葉どおり父は毎日毎日書き続け、常に失敗の書の山に埋もれていました。

■ 創作の原点

幼い時から、父は兄たちと仲がよかった。小さい頃、貧乏だったためにお金を払えず、兄と共に遠くから紙芝居を観ていると、怒った紙芝居屋に兄は殴られます。幼い弟がいるので兄は逃げずに耐えました。そしてこのことはその後お互い一切他言しなかった。切ない思い出です。

「ひぐらしの声」

ああ 今年も ひぐらしが鳴き出した
ひぐらしの声は 若くして戦争で死んだ二人のあんちゃんの声だ

そして 二人のあんちゃんの名を 死ぬまで呼びつづけていた 悲しい母の声だ

そしてまた 二人のあんちゃんのことにはひとこともふれず だまって死んでいったさびしい父の声だ

ああ 今年も ひぐらしが鳴き出した

二人の兄は異国で戦死しました。わが子を亡くした祖母の悲しみの姿は発狂さながらで恐ろしいほどだった。と、父は話していました。

また、父である祖父は、逆に全くそのことには触れずに、この世を去ったとのこと。おそらく触れられなかったのでしょう。このいのちの体験は、相田みつをの創作の原点となったのだと思います。

抄録 中川千都子

《グループ討議》

相田一人館長の講義をお聴きした後、塾生が各グループに分かれ講話内容について討議し、グループごとにまとめられた感動語録を発表しました。

【Aグループ】

- ① 一生勉強 一生青春
- ② 上手い字は「感心」してもらえても「感動」してもらえない。
- ③ つまづいたり転んだりする方が自然で、肥料になり「いのちの根が深くなる」

【Bグループ】

- ① つまづいたっていいじゃない人間だもの
- ② すべての逆境から作品が生まれている
- ③ 七転八倒

【Cグループ】

- ① 一生勉強 一生青春
- ② いのちが深くなる
- ③ 幸せは自分の心がきめる



「雨の日には雨の中を」

小南昭雄

昨年に引き続き2度目の高野山研修。昨年は初めてで要領が分からず戸惑った。大阪より7度くらい気温が低いと聞いていたが、思ったほど寒くなかった。しかし流石の自称晴男も今回は雨に降られたが、後になってその理由が分かり成程と納得する。

さて、初日の講師である相田一人先生の紹介を私がさせていた。昨年名古屋での講演をお聴きして、是非4期の講師にと事務局に強く要望、その願いが実現したので石井さんから小南さんお願いしますと言われ、ハイ喜んでとお引受けしました。相田先生を紹介する中で私の体験をお話しました。

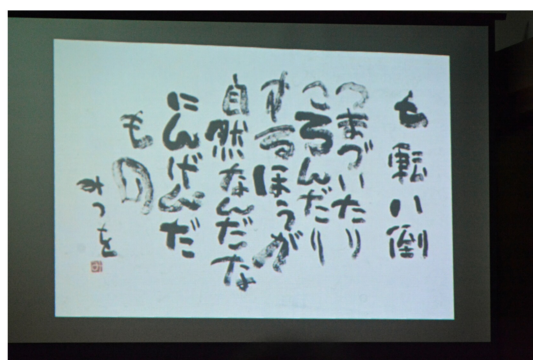
私が松下電器に入社して数年経った時、あることでひどく落ち込み会社を辞めようかと悩んだことがありました。その時に名古屋の友人からある本が送られてきました。本の題名は『にんげんだもの』。その本の中に「つまづいたっていいじゃないか にんげんだもの」の言葉がありました。もしその時この言葉に廻り

合っていなかったらひよっとすると松下電器を辞めていたかもしれません。私にとって逢うべき時に出逢った本でした。本を送ってくれた友人には感謝をしても感謝しきれません。それ以来相田みつをが大好きになりました。

講演の後、奥の院を参拝。雨の中での参拝となりましたが、相田先生が一番好きな詩「雨の日には雨の中を 風の日には風の中を」を聞いた後でしたので雨もまた良しの心境で参拝することができました。

交流の夕べでは一人一分のスピーチが、皆さん熱が入り1時間近くもオーバーするほど盛り上がりました。二日目の浅井周英先生の講演は、リアリティー溢れる内容で引き込まれました。

研修終了後、山路さんの車で九度山町へ行き、入江富美子監督作品「天から見れば」の上映会に参加、素晴らしいドキュメンタリー作品で感動しました。この時に大石順教尼が雨女であったことを聞きました。入江監督にもお会いすることができ、楽しく充実した二日間でした。



人間学講座
第41講

「師ありてこそその人生」

浅井周英先生



□ 三奉請

浄土真宗の僧籍をお持ちの浅井先生は、真言密教の靈地である高野山で弘法太子をたてまつり、敬い、礼を尽くし、三奉請を唱えて頂きました。

■ 森 信三先生との出会い

私と森信三先生との出会いは、私が中学の教員を辞めて、故郷の和歌山に戻り小学校の教員になったときでした。一教科を担当する中学と違い、小学校は全教科教えなければならぬ上に、子どもたちはなかなか座ってくれることすらしない。新学期早々これまでの教育上のギャップが大きな悩みとなりました。しかも父の死、病弱の母の介護も重なり、さらには自分自身の縁談も破談となり、いわば何一つ良いことのない時期でした。常に晴れやかな気持ちになれない。そんなあるとき学校の書棚で森信三先生の『理想の小学校教師像』という古びた本を見つけ、早速その夜読み始めたが、眠れなくなりました。それまでずっと悩んでいたことが、この本の中で森先生は微に入り細に入り書いてくださったのです。

感激と感動から奥付けにある森先生の住所に手紙を書いたものの、宛所なしで返送されてまいりました。残念でしたが、とにかく私は、本に書かれてあったことを翌日から次々行動に移していきました。そうしますと、三ヶ月もたたないうちに荒れ放題だったクラスが変わり始め、軌道に乗ってきたのです。

森先生の教えは本物だ！そう実感し、森先生の教えの取組みをそれから五年続けました。その五年目、昭和四十六年一月、ようやく森先生にお会いすることが叶ったのでした。

先生との出会いは、悩んで、求めて現れてくださった。まさに「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時に」の言葉どおりでありました。その後はただ先生に一生ついていこうの一心でした。

森先生は、大切な教えを短い言葉で伝えておられます。

○ 職場であれ学校であれ再建に着手すべき三原則は、「場を清め・時を守り・礼を正す」。

それから、戦後教育でぬけているのが、「人間学」人間如何に生きていくべきか―で、それを森先生は簡潔にまとめて頂いたのが、

○ しつけの三原則で、

「あいさつ・ハイの返事・はき物を揃える」これを徹底してしつける。

親御さんからは、そんな三つのことで良いのですか、との質問をよく受けますが、新幹線でも二本のレール軌道で、安全に目的地に運んでくれるので、あれもこれもと取り組まなくともよい、これというものを一生やり続けてゆくということが、人間の軌道に乗せる秘訣なのだと、教えて頂きました。

○ 「立腰の効用」―腰骨を立てる―

心はころころ動くからこそ、腰骨を立てて体から整える。そうすることで持続力、根気力、実践力が自然と身につき。

平成四年十一月二十一日、先生は、満年齢九六歳で亡くなられました。その時のお顔は驚くほど柔和であられたと伺い大変嬉しかったのを覚えています。森先生との出会いがなければ、私の人生はどんなものだったのか。

それを思うにつけ終生の師に出会うことは、なによりありがたいことだと思います



《グループ討議》

浅井周英先生の講義をお聴きした後、塾生が各グループに分かれ講話内容について討議し、グループごとにまとめられた感動語録を発表しました。

【Aグループ】

- ① 心はころころ変わるから腰骨を立てる
- ② 小さな実践
- ③ 真心を込めた話し方

【Bグループ】

- ① 「人生二度なし」今、ここを頑張るを与えられた仕事を一生懸命することが大切、現場を離れない
- ② 立腰 心身一如（躰が先、体が心を育てる）
- ③ 死後の世界

【Cグループ】

- ① 死後の世界は、生を生かすためのもの
- ② 新幹線の二本のレール
- ③ 職場の三原則（実践継続はなかなか難しいもの）



「感動いっぱい高野山宿泊研修」 西尾千恵子

11月14日橋本駅で「天空」に乗換、高野山に着くと、其所はすでに非日常空間。

当日は、相田一人先生「相田みつを肩書きのない人生」と題し、高校生の頃まで一緒に過ごされていた父相田みつをさんについての話を拝聴した。

みつをさんは戦争で二人の兄を亡くし、親の張り裂けんばかりの悲しみ、自身の無実の罪を背をわされたり、不正を追及したことで、ひどい暴行を加えられ人間不信になったり、極貧の中で書を書き続けるという数奇な人生を歩まれた。

そんな中で生まれた書は、体験からにじみ出た、感動の詩であり、独特の文字は思いの魂を伝えるためのもの、真に「生命の詩人」なんだ深く味併せてもらおう。

雨の中の、奥の院参拝はガイドさんの詳しい説明のお陰で、一二〇〇年の歴史の凄さを感じる。

人生二度なし、これからの自分の生を真つ当にと思う。

翌15日には、朝のお勤め、写経の後、浅井周英先生の「師ありてこそその人生」を拝聴。中学校から転勤された小学校で悩んで、求めて出会えた一冊の本「理想の小学校教師像」(森信三著)により、学校が三ヶ月で軌道に乗ってきたこと、戦後教育で抜け落ちたしつけの大切さ、その三原則(あいさつ・返事・ハキモノを揃える)は、九つまでに身につけさせる。すなわち人間としてのルールを敷くこと、また立腰によって気持ちを切り替え、話を聞ける体勢にすることなどの実践のDVDは、とてもすばらしかった。

また、自分のできる範囲で人に役立つ実践を二といわれていました。自分の求めている内容が聞け有難かった。

帰りは、山路さんの車に五人乗せてもらい九度山へ大石順教尼記念館行事の映画と対談に圧倒されました。



「高野山研修に参加して」

驚見誠司

宿坊「清浄心院」の屋根に雨の音がする。松皮葺の屋根でも、バラバラと激しい雨音がはつきり聞こえる。「こんな時でも小さな折畳み傘で、奥の院参拝に行くの？」と思うもつかの間、肅々とスケジュールが遂行される。

幸いガイドさんが、一つ一つのお墓の由来から丁寧に教えてくださり、やっぱり来て良かったと思うものの、樹齢数百年の杉木立でも弱まることなく雨が降り、ズボンのみならず、靴下もすっかり濡れてきた。先程の講座で相田一人先生が一番好きな詩は「雨の日には雨の中を 風の日には風の中を」とお聞きし、成程と思ったにもかかわらず、降り続く雨を疎ましく感じました。

二日目の浅井周英先生の講座では、一年に二回の卒園式と、心を閉ざした不良青年と三上先生の命がけの対話に感じ入りました。最近ふと、自分の心が冷えていると感じることがままあります。それがこの人間学

塾に入塾したきっかけでもあります。浅井先生のお話を伺い、自分に欠けているものは「覚悟」だと気付きました。自分の立場は確保して、その上でというレベルでは……。この講座で一つの大切な心構えを教えてくださいました。

全ての研修が終了し、帰ろうと門に向かった所で「九度山の太石順教尼特別公演に一緒に行きませんか」と声をかけていただきました。その特別公演は、太石順教尼と最後の弟子南正文さんの壮絶なドキュメンタリー映画そしてゆかりの方々による対談で、あらためて「覚悟」の凄さを感じ知らされました。対談の中で、入江映画監督から「太石順教尼は大変な雨女で、大事な撮影の時はいつもすごい雨でした」とのお話があり、昨日の奥の院・腕塚参拝時の雨は、太石順教尼の歓迎の雨で「常に多少の不自由さがあるがまさに受け止めていきなさい」との教えの雨に思え、満たされた気持ちで一杯の研修となりました。

この研修でお世話になった方々、本当にありがとうございました。



来年より始まるNHK大河ドラマ「真田丸」の宣伝にラッピングされた南海電車。いま地元はNHKの取材で超多忙のようです。



相田一人館長を囲んで記念撮影



「雨もまたよし」で雨の中奥の院参拝で説明を聞く。



食事の前は行儀良く…「いただきます!!」

第一期京都宿泊研修で工房を訪問、大仏師松本明慶師造立の高野山中門に開眼法会された四天王像のうちの、増長天と広目天の両像



大石順教尼腕塚



《お薦め書籍》

『哲学敍説』

(初めて哲学を学ぶ人のために)

森 信三 著



発行 致知出版社
価格 二,七〇〇円(税別)
ISBN-13: 10978-4800910851

寺田一清先生は、「一代にわたる独特の学問・思想・実践の行学一如の体系が確立包含されている」と述べる。森信三師が解釈した「哲学」を述べ説く内容となっており、この国で生を受けた意義を「自覚」した者が、いかに現実社会の学問や芸術、宗教といった面で実現していくかが述べられている。それはそのまま「自覚」した著者の学問や芸術に対する表白ともなっており、その思想的背景がわかる必読の一冊と言ってもよいでしょう。

《大悟徹底》(寺田顧問のお話を抄録させて頂きました)

「夏本番」

元気をいただく言葉」

平成20年8月12日
「天分塾ニュース」

先日、駅構内の小さな本屋をのぞくと、一冊の本が目にとまりました。先哲の「書蹟」の写真集で、白隠あり、西田幾多郎あり、高浜虚子あり、斎藤茂吉あり、その他、政治家や作家・芸術家の書がずらり掲載され、興味をひかれ、よほど購入の意欲にかられましたが、思いとどまることにしました。その中でもっとも注目いたしました。

画家須田剋太さんの一幅の書でありました。

四十五は花なら薔
七十八は働きざかり
九十になって迎えて来たら
百まで待てと追い返せ

《一月 人間学塾・中之島》

■ 第四期 基本カリキュラム

*日時 1月9日(第二土曜)

午後12時〜受付 開講午後1時〜

*場所 大阪大学中之島センター

10F 佐治敬三ホール

*講師 木南一志氏

「学歴よりも本気歴」

一九五九年兵庫県に生まれる。大学卒業後、サラリーマン生活を経て、父が創業した貨物自動車運送業の新宮運送に入社。30歳で(株)兵庫物流を立ち上げ、社長に就任。その後(株)新宮運送の常務取締役を経て、平成13年代表取締役社長に就任。

※ 1月に予定していました鍵山秀三郎先生は、11月初旬体調不良(軽度の脳梗塞)により入院され、現在は復調に向けてリハビリに努めておられます。

よって1月の講師は、鍵山秀三郎先生の意向で、株式会社新宮運送代表取締役社長で、「播磨掃除に学ぶ会」世話人の木南一志氏に登壇いただき、ドライバーの心づくりから安心・安全の物流事業を展開するリーダーのあるべき自分づくり・人づくりを語って頂きます。

《郊外学習概要!!》(予定)

◆ 日程 平成28年4月23日(土)

◆ 行程 和歌山県串本町・広川町

↓ トルコ記念館

↓ エルトウールル号海難事故慰霊碑

↓ 稲村の火の館

《塾生 住所訂正!!》

広瀬育代さん

〒540-0033 大阪市中央区石町1-2-1

天満橋スカイハイツ 303

《淀川掃除に学ぶ会》短信

世話人 志村隆夫

12月6日(日)朝から少し曇り空でしたが、風もなくお掃除日和となりました。集合時間は、12月3月の冬季は入り口の門のゲートが開くのが30分遅いため8時半となりました。

ゴミの量は、徐々に減ってきて今回は34個のポリ袋と粗大ゴミ、発泡スチロールの箱スパーの荷運び車、自転車など各々1台だけでした。

参加人数は29名と少なかったのですが、吉寿屋の会長様から5冊目の出版となる著書を皆さんに寄贈して頂きました。とても素晴らしい本ですので、お勧めしたいと思っております。出版社は元就出版社、『商いの神様に後押しされる生き方―企業好転29の法則』というタイトルで定価は11,000円です。ちなみに吉寿屋さんは50年間ずっと黒字経営の超優良企業です。

来年1月のお掃除始めは、第2日曜日、1月10日午前8時30分から開始致します。奮ってご参加いただければ幸いです。

(追伸)

今回の掃除の直前にお体を悪くされていた石丸郁枝様がお元気な姿でお見えになり、美味しいリンゴを差し入れていただきました。また、終了後は東様から、いつものとおり暖かいコーヒーとお茶、パンとケーキをご馳走になりました。

感謝

問合せ 〇九〇一八八四一七六五(小西)

〇九〇一七五五五八七七七(志村)

